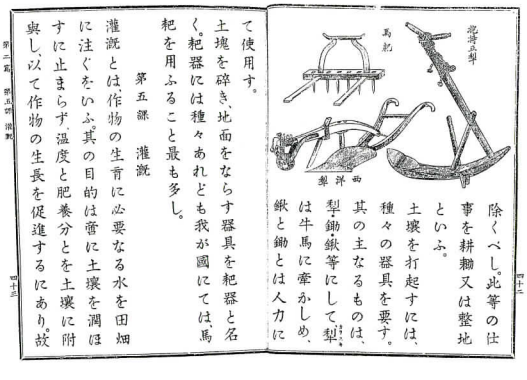
24歳の小学校長

西欧文明の導入が進められていた明治時代では、富国強兵、文明開化と並んで殖産興業が国策の大きな柱とされていました。中央から離れた九州では、殖産の中でも農山村の近代化が大きな課題となっていました。

家族労働が中心の農林業、徒弟労働の建築工芸などで、脱皮を目指して優秀な人材と教育が求められていました。そうした時世に、乾田馬耕や水田二毛作など先進的な農業技術（筑前農法）を育てた功労者の一人が、農学者の松下盤根です。

1874年（明治７）11月２日、御笠郡山口村柿ケ久保（筑紫野市大字山口）の農家・松下惣七の子として生まれ、幼名は卯之吉、生前の実名が盤根です。中学修猷館で学んだ後、福岡師範学校(現福岡教育大)を1896年（明治29）３月に卒業、三井郡松崎高等小学校の訓導として教育界に入りました。２年後には小郡尋常小学校の校長に就任しています。弱冠24歳、その偉才ぶりがうかがえます。

▲松下盤根の記念碑


除くべし。此等の仕事を耕耡又は整地といふ。
土壌を打起すには、種々の器具を要す。其の主なるものは、犁鋤鍬等にして犁は牛馬に牽かしめ、鍬と鋤とは人力にて使用す。
土塊を碎き、地面をならす器具を耙器と名く。耙器には種々あれども我が國にては、馬耙を用ふること最も多し。
第五節　灌漑
灌漑とは、作物の生育に必要なる水を田畑に注ぐをいふ。其の目的は啻に土壌を潤ほすに止まらず温度と肥養分とを土壌に附與し、以て作物の生長を促進するにあり。故

▲『新編 農業読本』（1903年刊）

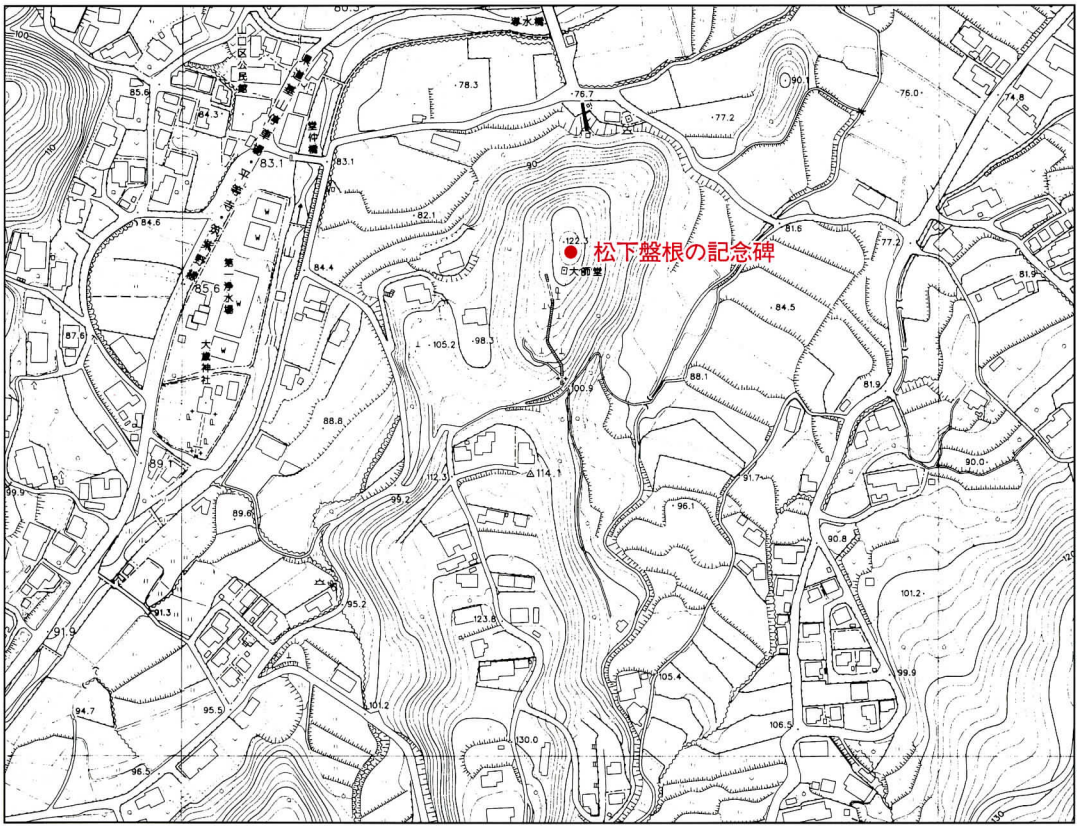
ところが、盤根は、貧困な農村を豊かにするため小学校長の職を捨て農業教育の向上に情熱を傾けたのです。1899年（明治32）春には上級農科大学内の教員養成所に入って研修を重ね、福岡県農事試験場技師になっています。その後、同県農業学校教諭兼福岡師範学校訓導として農業教育に尽くしました。この間、自らの教育実践のための理論を『新編 農業読本』上・下巻ほか十余部の教科書にまと

めています。

また、福岡県教育会の委嘱で『小学農業書』上・下巻も編さんしました。こうした中で身体をこわし、1903年（明治36）病気退職し、故郷で静養しながら著作活動を続けましたが、２年後の８月29日に死去、数え年32歳の若さでした。その教科書では、季節ごとの作物をテーマ別に配列し、工芸作物や畜産、園芸のほか季節と天候、農業の効益などについて技術論から経済論まで幅広く著述しています。とくに「農業は人に衣食住の原料を与えるものにして、実に諸職業の本源、国家富強の基となる」と基本理念を説いています。信用組合と農会を組織して、私利を顧みることなく公益性を尊重し、収支計算と帳簿の必要性を説きました。今から約100年前の先見性に驚かされます。

同じ「福岡農法」普及の功労者では、旧山家村の砥綿忠衛門の長男で、後に旧夜須郡三並の豪農の養子長沼幸七がいます。1883年（明治16）、石川県の教師から岩手県農業講習所の教師として馬耕の技術を伝え、佐渡では甘藷栽培に成功しています。後に松下盤根と同じ福岡農学校教諭となり、裸麦の品種「竹下」を育てて全国ブランドとしました。この品種名こそ当時、農学校の所在地にちなんで名付けられたものです。こうした先進的な技術開発が、今日の豊かな食料資源を生み、農村の生活を向上させてきた事実を、私たちは忘れるわけにはいきません。

〈参考〉「福岡農法」ちくしの散歩㊾



2000年３月31日発行